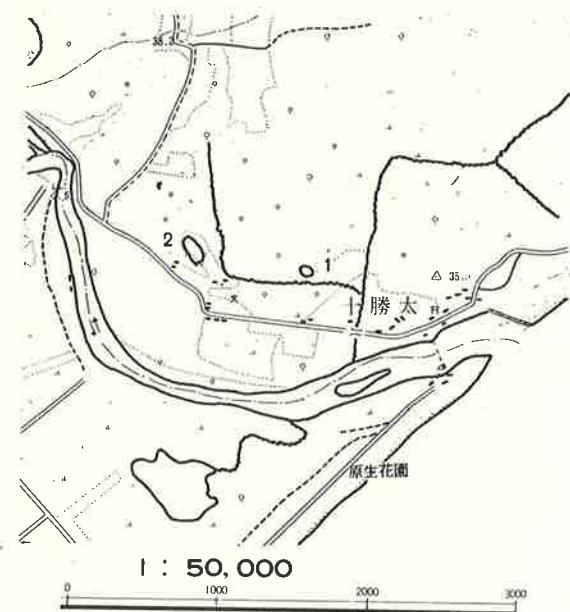


十勝地方におけるオホーツク

吉野 勢津子



Map 1 十勝太附近地形図（1：十勝太古川遺跡
2：十勝太若月遺跡）

I

ここに紹介するFig 1-1の資料は、1972年に発掘された浦幌町字十勝太 298番地の十勝太古川遺跡 (Map 1-1) 第8号住居址の東南東1.1mの盛土下より出土したものである。①

当遺跡は旧十勝川に流れ込む小川に狭まれて南東方向にやや舌状に突出した緩傾斜をなす丘陵中腹上に位置し、当遺跡地点は標高14m、比高差約4mであり、時代は、擦文期に編年されるものである。

本土器は、口縁部及び胴部の一部と底部しか残存していざ、胴部の大部分は数片の土器片を残すのみであるが、口径21.6cm、器高28cm位と推定される深鉢形の土器である。色調は黒褐色をおび、胎土には砂粒・小石を含み、焼成はやや悪く一般に土器全体が脆くなっている。文様形態は貼付文が全体を占めており、口縁部においては二条の直線文が一条の波線文を囲み、以下胴部上半に上部

から二条の直線文、一条の波線文、二条の直線文一条の波線文を囲む二条の直線文が施されている。

本土器は、半分位しか残存していざ、図上復原を試みてみたが、この土器の大きな特徴は器形にある。即ち胴部最大径が口径よりは大きくならないとされている擦文式土器的要素と、底部が胴部よりの線が曲がることなく底部外端に伸びているオホーツク式土器的要素から構成されている、いわゆるオホーツク式土器と擦文式土器の「融合形式」あるいは「接触形式」と呼ばれるものである。

II

次いで紹介するFig 1-2の資料は1973年に発掘された浦幌町字下浦幌東5線南82番地の十勝太若月遺跡 (Map 1-2) 第8-3区の覆土中から出土したものである。

当遺跡は、十勝太古川遺跡の存在する丘陵から東へ約300mのところの丘陵に位置しており、旧十勝川から約1kmほど北にある。当丘陵は、やや南東方向に突出し、当遺跡丘陵上にはゆるやかな尾根を思わせる部分が馬蹄形状に発達している。標高は約30mであり、該丘陵の南端は比高25mで崖状を呈している。尚、発掘調査の結果当遺跡は繩文早期から擦文期までの各時期におよぶ重複遺跡であることが判明した。

ここに紹介する土器片は、やや外反する口縁をもち、色調は黒褐色をなし、胎土に砂粒を含み焼成は良好である。文様は貼付文であり、口縁部は一条の波線文を囲む二条の直線文、一条の直線文と波線文が施されており、胴部上半においては一条の波線文を囲み二条の直線文、そのうち下方の直線文の幅が他方よりも広くなっている。この文様に接して二個一組となってボタン状の突起の貼付文がみられる。その下には三条の直線文が施されている。

本土器片は、口縁及び胴部への伸び具合から推

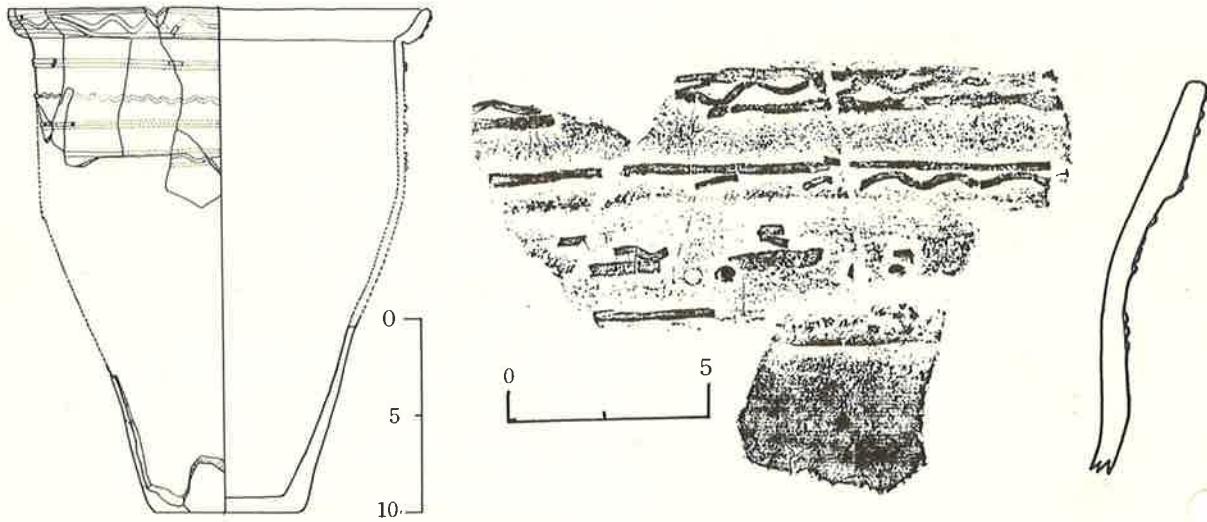


Fig. 1 十勝太出土の土器 (1:十勝太古川遺跡 2:十勝太若月遺跡)

定して、オホーツク式土器^e群の中に編入される
ものと思われる。

III

十勝太古川遺跡において融合形式の土器、十勝太若月遺跡においてオホーツク式土器片が出土したということは、従来オホーツク式土器が出土する南限を釧路地方とされていたものを十勝地方附近まで広げる積極的な根拠となりうるものであろう。

十勝地方はオホーツク式土器文化圏外であるため、e群の出土は注目されるところであるが、これは、直接オホーツク文化の荷負者との交渉があったのではないかということは、一片の土器片からは断定することはできないし、むしろ釧路地方のルートをたどって何らかの理由をもって十勝地方に流入されたものと考えるのが妥当であろう。

融合形式の土器は、擦文文化とオホーツク文化との関連を解明する重要な資料として位置付けられる。十勝太古川遺跡で出土したものと同じような土器を出土する遺跡は現在のところ私見の限りでは、次の20の遺跡を数えることができる。

1. 常呂町栄浦第二遺跡^④
2. 常呂町トコロチャシ^④
3. 美幌町鳥里^⑤
4. 女満別町湖南^⑥
5. 女満別町元町^⑥
6. 網走市モヨロ貝塚^⑦

7. 斜里町ピラガ丘^⑧
^⑨
8. 斜里町宇登呂滝ノ上^⑨
9. 羅臼町ルサ^⑩
10. 羅臼町トビニタイ^⑪
^⑫
11. 羅臼町トビニタイ洞窟^⑪
12. 羅臼町オタフク^④
13. 国後島古釜布^⑫
14. 標津町伊茶仁^⑬
15. 中標津町計根別^⑭
16. 別海町浜別海^⑯
17. 根室市東梅^⑮
18. 厚岸町下田ノ沢^⑯
^⑭
19. 釧路市別保^⑯
20. 弟子屈町下鎧別^⑯

これらの諸遺跡の中で完形及びそれに近い形で出土した5・7・18の土器群を見てみると、それらはいずれも擦文式土器的特徴をあらわす口縁部オホーツク式土器的特徴をあらわす底部をもつものであることがわかる。文様は、オホーツク式的文様、すなわち直線文、波線文の組み合せを主とするものであるが、5・15の遺跡の土器には、一個の土器片の中にオホーツク式的文様である縦繩文の貼付文、擦文式的文様である刻線文の組み合せをもつものがあるが、まだ土器片しか出土しておらず全体の器形を伺うことができないのが残念である。これらの土器群のオホーツク式土器と擦文式土器との関連について藤本強氏は、オホーツ

ク式土器e群に続くものではないだろうかとの見解を示し、大井晴男氏はオホーツクd・e群におくれる「接触様式」とし、擦文第2期末から第3期と併行するものであるとしている。石附喜三男氏によると「擦文式文化とオホーツク文化が接触したのは擦文式土器文化の側から言えば最終形式よりも一時期前、すなわち、横走綾杉文、小格子目文、文様帶複段文様が主として盛行する時期（擦文IV）であり、オホーツク式土器の貼付式浮文（藤本分類e群）の時期である。そして、そのような文様を有する土器はオホーツク式土器中のやはり末期型式とみられるのである。」との見解^⑯を出している。このように諸説が多くあり、融合形式とオホーツク式土器、擦文式土器との共存関係があまりはっきりとしていない。また、これに加えて、地域差・時間差及び二つの異質の文化が互いに接触する原因は何なのかも考慮にいれて、融合形式を考えなければならない。

さて、十勝太古川遺跡の融合形式は、どのような位置をもつものであろうか。この土器は住居址周縁部から出土したものであるが、この地方において、融合形式の文化が存在したことを考えることはできず、前述したように釧路のルートをたどって流入したものと思われる。擦文式土器との関連は、第8号住居址盛土下より出土しているので本住居址よりも古いということは推定できる。

以上のように、オホーツク式土器e群、融合形式の土器片が十勝地方から出土したことは、オホーツク文化の研究に重要な意義をもつものであり今後の調査に大きく期待するところである。

（国学院大学学生）

底面に貝殻背圧痕文のある土器

後藤秀彦

I

ここに紹介する土器は、北海道十勝郡浦幌町字平和85番地所在の平和遺跡で、浦幌高校郷土研究部員の手により採集され、現在浦幌町郷土博物館に所蔵されているものである。平和遺跡（Map 1）は、十勝川の支流下頃辺川の東側に形成された通

引用文献

- ①浦幌町教育委員会『十勝太古川・若月遺跡発掘調査概報—第一次発掘調査—』1973
- ②石橋次雄・木村方一・後藤秀彦『十勝太古月—第二次発掘調査—』1974
- ③藤本強「オホーツク式土器について」（『考古学雑誌』51-4）1966
- ④東京大学文学部考古学研究室『常呂』1967
- ⑤未報告
- ⑥大場利夫・奥田寛『女満別遺跡』1960
- ⑦大場利夫「モヨロ貝塚出土のオホーツク式土器」（『北方文化研究報告』12）1956
- ⑧斜里町教育委員会『ピラガ丘遺跡—第Ⅱ地点発掘調査概報—』1972
- ⑨駒井和愛編『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下 1964
- ⑩大沼忠春・本田克代「羅臼町出土のオホーツク式土器について」（『北海道考古学』6）1970
- ⑪宇田川洋「オタフク岩遺跡」（『羅臼』）1971
- ⑫石附喜三男「伊茶仁遺跡」1973
- ⑬児玉作左衛門・大場利夫「根室国温根沼遺跡の発掘について」（『北方文化研究報告』11）1956
- ⑭大沼忠春他『浜別海遺跡』1971
- ⑮沢四郎他『北海道厚岸町下田ノ沢遺跡』1972
- ⑯沢四郎・宇田川洋・豊原熙司『弟子屈町下鑓別遺跡発掘報告』1971
- ⑰大井晴男「擦文文化とオホーツク文化の関連について」（『北方文化研究』4）1970
- ⑱石附喜三男「擦文式土器とオホーツク式土器の融合・接触関係」（『北海道考古学』5）1969

称「吉野台」と呼ばれる段丘の西端部に位置する地点で現在は、土砂採集のため完全に煙滅してしまっている。本遺跡は、1967年と1970年の2度にわたって発掘調査がなされ繩文早期の聚落跡であることが周知されているが、ここに公表する資料は、その後に発見されたものであり、浦幌高校郷